

日展ニュース

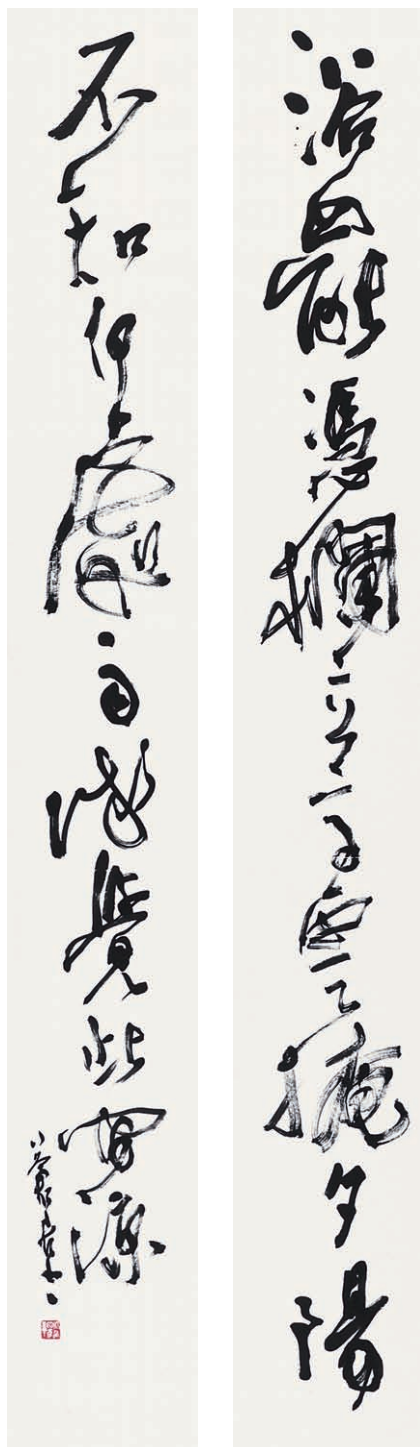
No. 182

<https://www.nitten.or.jp/>

令和4年9月30日発行

編集兼発行人 神戸峰男

第9回日展に向けて



袁枚詩 劉蒼居





「第九回日展を開催するにあたって」

日展理事長 宮田 亮平

四期八年の長きにわたり大改革をなさってくださりました奥田小由女前理事長の後を引き継ぐという大変重要なお役目を賜り緊張いたしております。

日本の文化振興のため、西洋諸国に追いつけ、追い越せの大号令の中で生まれた文展、帝展そして日展となり現在に至ったこの歴史ある日展は、すばらしい数多くの芸術家を輩出しているだけでなく、芸術がいかに関人に、日々の生活に大切であり、生きる勇気をも与えている

か、日展も常にその役割を務めていることを改めて感じています。

今、日本中がなかなかコロナの収束しない状況で、世情が不安定になっております。このような時こそ芸術の力、日展の力をもって世の中の人々にときめきを与えられる様、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五科が総力を挙げて懸命の努力をいたし第九回日展を開催することになりました。どうぞ皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第9回日本美術展覧会実施内容

会 期 令和4年11月4日（金）～令和4年11月27日（日）

観覧時間 午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで。）

休館日 毎週火曜日

入場料 ○当日券

（税込）

一 般 一、三〇〇円
 高 校・大 学 生 八〇〇円
 ○団体券（予約制）・前売券 一 般 一、一〇〇円
 高 校・大 学 生 六〇〇円

※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。

小・中学生は無料。

会 場 国立新美術館 東京都港区六本木七―二―二

◎新型コロナウイルス感染症対策のため、入場制限を行う場合がございますので、あらかじめご了承ください。



日展

第9回 日本美術展覧会

日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書

2022年
 11月4日（金）～27日（日） 火曜日休館

国立新美術館

◆主催：公益社団法人日展 ◆後援：文化庁／東京都 ◆観覧時間：午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）
 ◆入場料：一般 1,300円（1,100円）／高・大学生 800円（600円） ※（内）は2022年度は1,100円（900円）です。 ※小学生は600円（400円）、中学生は800円（600円）です。
 お問い合わせ：03-6812-9921（会期中） ※チケットやイベントなど最新の情報提供は「日展ウェブサイト」 <https://nitten.or.jp/> でご確認ください。

The Japan Fine Arts Exhibition



第9回日展 講演会・シンポジウム・映像による作品解説のお知らせ
 新型コロナウイルス感染症対策のガイドラインにしたがい、講演会・シンポジウム・映像による作品解説等を左記の日程で開催いたします。

（入場無料） 於国立新美術館 三階 講堂
 ※各日、講堂前にて整理券をお配りします。（定員80名 30分前）

月 日	講堂でのイベント
11月5日（土）	午後1時30分～3時30分 （日本画） ※途中10分休憩 映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者（大臣賞・都知事賞・会員賞・特選） 今年度審査員と新入選者による座談会 今年度審査員 今年度新入選者
11月12日（土）	午後1時30分～3時30分 （洋画） ※途中10分休憩 今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会
11月19日（土）	午後1時30分～3時30分 （彫刻） ※途中10分休憩 座談会「作家が語る制作の舞台裏・アトリエと制作と作品と」 山田朝彦・石田陽介・田中厚好 映像による作品解説「彫刻」 堀内秀雄・間島博徳・鈴木紹陶武
11月23日（水・祝）	午後1時30分～3時30分 （工芸美術） ※途中10分休憩 シンポジウム「工芸とワザとデザイン」 今年度審査員
11月26日（土）	午後1時30分～3時30分（書） ※途中10分休憩 シンポジウム「日展の書」 （進行）土橋靖子 岡野楠亭・倉橋奇岬・西村東軒・福光幽石・吉田成美 作品解説「書」 植松龍祥・田中徹夫・和中簡堂

◎なお、今後の状況によっては変更が生じる可能性がありますので、最新情報は、公式サイトで告知させていただきます。

第九回日展 審査員・係

第九回 日展審査員 九四名

審査員長（理事長） 宮田 亮平

第一科（日本画） 審査員 一九名

（外部審査員）

神戸市立小磯記念美術館長
神戸ゆかりの美術館長
岡 泰正
美 術 史 家 菊屋 吉生

（副理事長） 佐藤 哲
（理事） 斎藤 秀夫
（監事） 難波 滋
（会 員） 三原 捷宏 磯崎 俊光
清水 優 田辺 知治
児島新太郎 土井原崇浩
錦織 重治 福田あさ子
茅野 吉孝 佐渡 一清
曾 劍雄 橋本 一貫
松本 貴子

（副理事長） 土屋 禮一
（理事） 渡辺 信喜
（会 員） 田島奈須美 川崎 麻児
中村 賢次 長谷川喜久
青木 秀明 大西 守博
木村 光宏 古澤 洋子
北斗 一守 間瀬 静江
水野 收 吉村 卓司
久米 伴香 仁志出龍司
新川 美湖

第三科（彫刻） 審査員 一九名

（外部審査員）

大阪芸術大学教授 石澤 典夫
埼玉県立近代美術館長 建畠 哲
多摩美術大学長

（副理事長） 神戸 峰男
（理事） 宮瀬 富之 山田 朝彦
（会 員） 宇治川久司 亀谷政代司
楠元香代子 原田 治展
村井 良樹 村山 哲
島田見根夫 田中 厚好
野原 昌代 馬場 正邦
伊庭 照実 植田 努
紺谷 武 東 誠

第二科（洋画） 審査員 一八名

（外部審査員）

大分市美術館長 菅 章
美術 史 家 八重樫春樹

第四科（工芸美術） 審査員 一九名

（外部審査員）

京都国立近代美術館長 福永 治
新潟県立近代美術館学芸課長 藤田 裕彦

（理事） 春山 文典 河合 徳夫
（会 員） 加藤 令吉 浅井 啓介
山岸 大成 高岡由美子 高名秀人光
友定 聖雄 中村三喜雄
前田 和伸 川口 満
兼先 恵子 西本 直文
佐々木眞澄 本間 秀昭
早瀬 郁恵
山本由紀子

（準会員）

宇治川久司 亀谷政代司
原田治展 村井良樹
島田見根夫 田中厚好
馬場正邦 伊庭照実
紺谷 武 東 誠

第五科（書） 審査員 一九名

（外部審査員）

東京国立博物館副館長 富田 淳
書文化・古筆研究者 名児耶 明

（理事） 星 弘道 土橋 靖子
（監事） 牛窪 梧十 中村 伸夫
（会 員） 田頭 一舟 伊藤 一翔
山本 悠雲 岡野 楠亭
岩永 栖邨 岡野 東軒
田中 徹夫 西村 成美
松清 秀仙 吉田 靖子
岩田 海道 平形 精逸
深瀬 裕之 吉見 靖子

（準会員）

宇治川久司 亀谷政代司
原田治展 村井良樹
島田見根夫 田中厚好
馬場正邦 伊庭照実
紺谷 武 東 誠

第九回 日展《係》

（印係主任）

第一科（日本画）

田島奈須美 ◎川崎麻児
長谷川喜久 ◎青木秀明
木村光宏 古澤洋子
間瀬静江 水野 收
久米伴香 仁志出龍司
新川美湖

第二科（洋画）

◎難波 滋 三原捷宏 磯崎俊光
清水 優 田辺知治 児島新太郎
土井原崇浩 錦織重治 福田あさ子
茅野吉孝 佐渡一清 曾 劍雄
橋本一貫 松本貴子

第三科（彫刻）

宇治川久司 亀谷政代司 ◎楠元香代子
原田治展 村井良樹 村山 哲
島田見根夫 田中厚好 野原昌代
馬場正邦 伊庭照実 植田 努
紺谷 武 東 誠

第四科（工芸美術）

加藤令吉 河合徳夫 山岸大成
浅井啓介 高岡由美子 高名秀人光
◎友定聖雄 中村三喜雄 前田和伸
兼先恵子 川口 満 佐々木眞澄
西本直文 早瀬郁恵 本間秀昭
山本由紀子

第五科（書）

◎土橋靖子 牛窪梧十 田頭一舟
中村伸夫 山本悠雲 伊藤一翔
岩永栖邨 岡野楠亭 田中徹夫
西村東軒 松清秀仙 吉田成美
岩田海道 平形精逸 深瀬裕之
吉見靖子

わくわくワークショップ

対象 小・中学生とその保護者

(参加費無料・保護者は入場券を各自用意ください)

実施日程

11月6日・13日・20日(日曜日)

午前10時30分～日本画・洋画・書

午後2時～彫刻・工芸美術

※各教室約2時間

申込受付

ハガキかFAXまたはメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数・希望日・希望部門(第2希望まで)を明記の上お申込み下さい。申込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。

(受付締切10/28必着)

受付人数 各教室5組(10名程度)

☆日展作家が直接指導します。

☆参加費無料

【お申込み・お問合せ】

〒110-0002

東京都台東区上野桜木2-4-1

日展事務局展覧会係

(TEL) 03-3823-5701

(FAX) 03-3823-0453

(E-mail) event@niten.or.jp

わくわくワークショップ

「手紙を書こう!」特別編

「手紙を書こう!」

今回は、いつでも参加していただけるイベントとして、「手紙を書こう!」を実施いたします。

作品をみて発見したこと、不思議なこと、聞いてみたいことを「言葉」にしてみよう!

●参加資格 小・中・高校生

●参加の方法

↓日展会場で作品をみて、好きな作品を選ぶ

↓「手紙を書こう!」コーナーで、その作品の作家に手紙を書く(質問、感想なんでもOK!)

★日展会場の専用ポストに投函すれば、特製缶バッチプレゼント!

※公式サイトでも受け付けます。

(缶バッチプレゼントは会場のみ) ↓作家から返事が届きます。

第9回日展では、新型コロナウイルスの感染拡大の予防措置として、以下のイベントを中止いたします。

●「触れる鑑賞」プロジェクト

●「ミニ解説会」

●「触れる鑑賞」プロジェクト

尚、今後の状況によっては変更が生じる可能性もございますので、最新の情報は、公式サイトで告知させていただきます。

第9回日展行事日程(予定)

※係会関係

10月23日(日) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(洋画・工芸美術)

10月24日(月) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(書)

10月27日(木) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(日本画・彫刻)

11月3日(木・祝)

○出陳者内覧

実施内容検討中

○大臣賞等受賞者発表

11月4日(金)

○第9回日展開会

11月17日(木)

○第9回日展授賞式

(国立新美術館講堂)

11月27日(日)

○第9回日展閉会

※出陳者懇親会・開会式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本年度開催なし。

第9回日展前売券販売店のご案内

(10月1日より販売)

プレイガイド

チケットぴあ・C Nプレイガイド・ローソンチケット・ファミリーマート店内Famiポート、他デパート(友の会)

東武・丸広

カルチャーセンター

読売・日本テレビ文化センター・NHK文化センター・ヨーク

カルチャーセンター、他に画材店・画廊・書道用品店などでも取り扱いがあります。

日展公式サイトでも販売しております。

《第9回日展チケット情報》

前売ペアチケット

通常、一般一枚一、一〇〇円(当日一、三〇〇円)の前売券を、ペアでご購入の場合、二、〇〇〇円に。通常の前売券より二〇〇円お得です。

※前売コンピュータチケット・日展公式サイトのみ

トワイライトチケット



時間限定の入場券

観覧時間 午後4時～6時

一般一枚 四〇〇円

高・大学生一枚 三〇〇円

※会場窓口のみ販売

特別寄稿

日展を拝見して感じたこと

藤嶋 昭

しばらく前までは、国際会議での講演のためによく海外へ出張していました。この旅の楽しみの一つが美術館や博物館めぐりです。

何回も行ったパリのオルセー美術館では、ミレーの『落ち穂拾い』、モネの『日傘の女』、ゴッホの『アルルの寝室』、ルノアールの『ムーラン・ドウ・ラ・ギャレット』などがお気に入りです。

フィレンツェのウフィツィ美術館では、ボッティチェリの『ヴィーナスの誕生』、レオナルド・ダ・ヴィンチの『受胎告知』に感動しました。マドリッドのプラド美術館では、ベラスケスの『ラス・メニーナス』、ゴヤの『マドリッド一八〇八年五月三日』を楽しみました。

博物館では、やはりロンドンの大英博物館が圧巻でしたが、記憶に強く刻まれているのは、バクダッドのイラク博物館で二〇〇〇年ぐらい前のバクダッド電池を見たことです。一九八五年、フセイン大統領から私の専門に近い太陽エネルギー研究センターの開所式に招待された時のことです。五〇〇年以上の歴史をもつメソポタミア文明の遺物など世界でも屈指の考古学コレクションが展示されていました。その後イラク博物館は、戦争の混乱に伴う略奪、閉館、再開と困難に遭遇することになってしまいました。中国にも何度も行っていきますので、書との関わりもあります。四〇年も前になりますが、湖北省にある襄樊大学で集中講義をしたことがあります。ここには諸葛孔明の三顧の礼をうけた場所もあり、すばらしい書の石碑もありましたので、いくつかの拓本も買いました。これの表装したものを今も書斎で眺めています。

東大時代の中国からの留学生、姚建年君は今では中国科学院の教授をしながら、院士として中国政府の要職を務め、さらに中国化学会の会長をしています。彼のオフィスには大きな机の上に紙が置かれ、太い筆で、ほぼ毎日、書を練習しているとのこと。各地に出かけると書を求められるそうで、私も彼の机の上で好きな言葉「物華天宝 人傑地靈」と書いてみました。これは懐かしい思い出です。

一〇年ほど前になりますが、東京理科大学の学長をしておりました折、新しく開設しました葛飾キャンパスに関係する会合で、日本画の福田千恵先生にお目にかかりました。それ以降、日展に招いていただき、すばらしい作品群を国立新美術館で拝見させていただいております。先般の会では、当時の理事長奥田小由女先生から工芸美術の作品について詳しく御説明いただきました。

日展では、あまりにも多くの作品が展示されていますので、ゆっくりと一つ一つを鑑賞することがむずかしく、足を止めてゆっくりと拝見するのは、やはり賞をとられている作品になっと思っています。これらの作品にはどれも特別な雰囲気を感じます。選ばれた方の喜びはいかに大きいかと想像するのですが、では作品が選ばれた主な理由については、美術に対してそれほどの知識がない私にとっては想像をすることもできません。

私の専門の理系、特に私は化学の領域ですが、研究成果の評価法はかなり決まっています。世界共通になっています。研究の結果として世界でまだ誰もやっていないオリジナリティーのある結果を得たと思ったら、まずは国内学会や国際会議で発表します。いろいろの質問を受けたのち、論文としてまとめ（今ではほとんど英文で）、専門の論文誌に投稿することになります。論文は、その分野の匿名の専門家二～三人によって

評価され、全員の意見が印刷可となって始めて、印刷公表されます。もちろんどの論文誌に投稿するかを決めるのが大切です。その論文誌も今までの実績によって評価されていて、高い評価の論文誌ほど採択がむずかしいわけです。例えばネイチャー(Nature)やサイエンス(Science)が高い評価をうけている論文誌です。

このように発表した論文をそれぞれの研究者が何報持っているのかによって、研究者が評価されます。しかも発表した論文がその後、ほかの研究者によって何回引用されて、その分野に貢献したかも指標になります。h指数(h-index)というのが一つの例です。理系研究者にとっては過去すべての業績が数字になって示されることになり、しかも世界における各研究者のランキングも公表されているのが現状です。インパクトのある良い研究をしたいと頑張っているのが私たち理系研究者です。

今回の日展をゆっくりと拝見することを楽しみに待ちつつ、次の研究テーマを考えているこの頃です。

藤嶋 昭（ふじしま あきら）



一九四二年東京都生まれ。東京大学大学院工学系研究博士課程修了（工学博士）。東京大学工学部教授、東京大学名誉教授、東京大学特別栄誉教授、東京理科大学学長を経て現在、栄誉教授。一九八三年朝日賞、二〇〇〇年日本化学会賞、二〇〇三年紫綬褒章、二〇〇四年日本国際賞、日本文化功労者。二〇一二年トムソン・ロイター引用栄誉賞。二〇一七年文化勲章。現在、川崎市名誉市民、豊田市名誉市民。

ホモ・サピエンス

芸術好きのこと

夢枕 獏

人は何故描くのか、という、今さらそこからくるか、というようなあたりから始めたい。これはもちろん、人は何故彫るのか、何故書くのか、何故作るのか、という問いに置きかえることもできる。

美や神、という言葉でもこの設問は成立する。

「人は何故そこに美を見てしまうのか」

「人は何故そこに神を見てしまうのか」

答は、もう出ている。それは、外にあるわけではなく、見る側の心の中に美があるからである。神がいるからである。もつとわかりやすく言えば、脳がそのようにできているからである。

ドイツのシュターデル洞窟から、象牙を彫刻した、三万二千年前のものと思われる、頭部がライオン、胸が人体のかなり写実的な像が発見されている。フランスのショヴエ洞窟の石壁には、三万年前の人の手形が残されている。人類が、衣、食、住以外のことでものを作ったり描いたりし始めたのは、この一万年、二万年のことではないのである。ホモ・サピエンスということでは、おそらくそれは彼らが集団でアフリカを出た七万年前か、十五万年前、あるいはそれ以上の時間を遡ることができよう。

多くの仕事回りの言葉で表現すれば、それは物語ということになる。

人の脳は、物語を作る。作らずにはいられない。たとえば、あなたが誰かと待ち合わせをする。その相手が時間になっても



改組 新 第1回日展
特別対談「アートの未来」

現われない。すると、もうあなたの脳は物語を作り始める。その相手が、寝ぼけをしたのでないか、来る途中で事故に遭ったのではないか、それともふられてしまったのか。あなたの脳は、相手が現われるまで、物語を作り続けるのである。

ある実験をした学者がいた。レム睡眠中の被験者に水をかけて起こす。すると、目覚めた被験者は、次のようなことを話す。

「夢の中で、川にかけられた丸木橋を渡っていたら、すべて水に落ちて目が覚めた」

これは順序が逆だ。被験者は、水をかけられてから目が覚めるまでのほんの一瞬で、その脳が「水に落ちたから目が覚めた」という物語を作ったのである。

三〇万年前の森の中を、猿人が歩いている。背後で音がする。この時、

「後ろの繁みで、肉食獣が自分をねらっているのだ」

という物語を作ることのできた脳だけが、生きのびる機会を増やしたことになる。

ネアンデルタール人は、三万年前に絶滅し、ホモ・サピエンスが生き残った。何故彼らが滅び、我々人類が生き残ったのか。それは、ネアンデルタール人の脳と、ホモ・サピエンスの脳とを比べた時、その能力に差があったからだと言われている。

ネアンデルタール人の脳は、あるひとつの物語を、ほんの数家族でしか共有できなかった。

しかし、我々人類ホモ・サピエンスの脳は、より大きな集団で、ひとつの物語を共有できた。それは、たとえば神話である。宗教である。現代で一番大きな物語、それはお金であるのは間違いないが、より大きな集団、より大きな社会でひとつの物語を共有できる種が生き残るのは、これは自然なことであろう。おそらくその

方が、進化論的に生き残りやすかったのではないか。

人は、森の中で、神話を作る。風のそよぎや、葉の揺れ、雷、大岩―それらのものを見たり、自然現象に出会った時、そこに霊を見、神話を作る。稲妻が光れば、それを「大神ゼウスが怒っている」という物語にすることで、人は天地とおりをあいつけてゆく。つまり、今も我々は神話を作り続けているのである。

もちろんこれは、神への供物であるところの芸術のことでもあることは言うまでもない。ヒトは、その脳の性質上、美や、神や、物語を作らずにはいられない生き物なのである。

つまり、我々が、物語を書いたり、絵を描いたりするという行為は、ホモ・サピエンスとして、きわめてまっとうなお仕事ではありませんか、というのが今回のオチでございました。

夢枕 獏（ゆめまくら ばく）



©Susumu Nagao

一九五一年神奈川県生まれ。東海大学文学部日本文学科卒業。

一九七七年に作家デビュー。「キマイラ」、「闇狩り師」、「大帝の剣」、「餓狼伝」、「陰陽師」などのシリーズを発表。

一九八九年『上弦の月を喰べる獅子』で日本SF大賞受賞。一九九八年『神々の山嶺』で柴田錬三郎賞受賞。二〇一一年『大江戸釣客伝』で泉鏡花文学賞、舟橋聖一文学賞、同作で翌年吉川英治文学賞受賞。二〇一七年日本ミステリー文学大賞、菊池寛賞受賞。紫綬褒章受章。作家。

第九回日展 各科審査員より

軽やかに穏やかに

中村賢次（第一科 会員・審査員）

日本の美術文化は個々が精進を積み重ねながら、皆が集い研鑽してその時代ごとに育んできたものであると思います。そこには常に未来があるはずで、僭越ながら私も今その一部を担っているのであれば、そのことを踏まえて鑑審査に臨まなければと思っています。しかし、当然と言いますが、残念ながら鑑審査をさせて頂く年はどうしても私自身の出品作品は肩に力が入り過ぎて固くなって後悔してしまいます。以前、俳優の故・大滝秀治さんが「役者は棒玉じゃなければならぬ。直球じゃなきゃダメなんだよ。」とおっしゃっていました。邪念を捨て、無心であることによってのみ生まれるものは、人間によってのみ生まれるもので「共感」につながる尊いものなのでしょう。だからこそ鑑審査の重責にあたっては体を張りつつ心を軽やかに穏やかに保ちながら、制作者の方々の各々の取り組みや想いが画面に宿った作品に出会えることを楽しみに拝見したいと思います。



日展、神戸へ

久米伴香（第一科 準会員・審査員）

二十七年前、阪神・淡路大震災が起きた時、私は日展の作品に取りかかっており、被災しました。被災し、これが最後の作品になるかもしれないと思いながら出品致しました。



大きな自然の力の前では何をすることも出来ず、ただ祈るばかりでしたが、傷ついた心を癒してくれたのも、また穏やかな自然の風景でした。その後、先生、先輩、友人、家族、その他多くの方々に支えられて、今日まで絵を描き続けることが出来ました。

生まれ育った神戸の地で、五十四年ぶりに日展が開催される事になりました。その年に審査員を拝命し、様々なことを思い出し、その重責に身の引き締まる思いが致します。

今この瞬間も、出品される方々は様々な困難に立ち向かいながら制作に励んでおられることと存じます。皆様のお作品に込められた想いと真摯に向き合い、心を込めて鑑審査に臨みたいと思っております。

日本画の未来

新川美湖（第一科 準会員・審査員）

私はこれまで、緑青や胡粉などの伝統的な天然系の岩絵の具のみで描くということを自身に課しながら、日本画という枠の中で新しい表現を模索して参りました。さらに四年程前からは、かねてから興味があった墨を主体とした制作に取り組み、墨と水のみという一層限定的な画材の中で、現代日本画表現を探索しています。

私の描いてきた題材はささやかな自然が多いこともあり、とすると古臭く勢いのない作品に見えるのではないかと、不安な思いを抱きながら制作して参りました。そのような中でも日本画を幅広く捉え、叱咤し、前向きに御指導して下さいました先生方にはとても感謝しております。今後とも現状の表現に満足せず、新しい伝統を紡ぎ出すことができるような日本画表現を探索して行きたいと考えています。

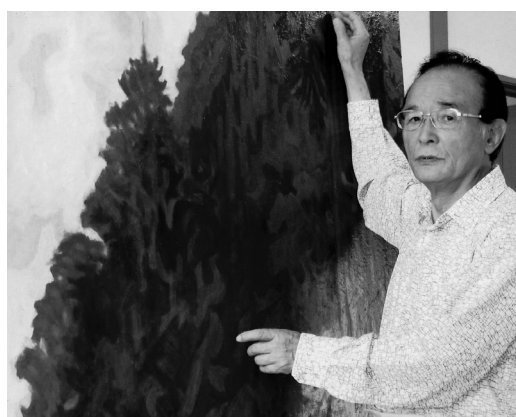
初めての鑑審査に臨むにあたって、日本画の伝統を継承しながらも、新しい息吹が感じられる作品に立ち会えることを、とても楽しみにしています。



夏の森

磯崎俊光 (第二科 会員・審査員)

今年の夏は特に暑く、新型コロナウイルスの感染が収束するかに思われたのも束の間、第七波の急拡大が心配される昨今です。



今日は「山の日」、幸い天気が良いので出掛けることにしました。

この山は平安時代に開山された霊山です。登って行くと、山を背にした剛健な山門があり、それを取り巻く様に樹齢三〇〇年〜八〇〇年の杉の大樹が林立しています。その一本一本が急傾斜の険しい条件の中で力強く枝葉を伸ばし躍動している様はみごとです。木肌には潤いが感じられ生き生きとし、急斜面から天に向かって真直ぐに伸びる姿は壮麗です。杉は殺菌作用のあるフィントチッドを発散すると言われ、その森の清浄な空気を吸い込んで、豊かな森の気分浸ることができました。

コロナ禍で疲弊した心に響く生き生きとした絵を描きたいと思うこの頃です。各自がそれぞれの生活環境の中で、独自の情趣を発揮した力作を楽しみにしております。

審査員を仰せつかつて

錦織重治 (第二科 会員・審査員)

未だ終息しない新型コロナウイルス感染症には、益々私自身も疲弊感が増してきております。

しかし、皆様におかれましては、これにも耐え抜いて苦闘しながら各々が思いの詰まった作品を仕上げてこられることと存じます。

私もこれまで以上に心して真摯に鑑審査させて頂きたいと思っております。

審査員として、見識が求められる一方、私自身の作品もみられることになります。

この原稿を書いている机の横には、出品を控えている作品が鎮座しており、いやが応にも目に入ります。

「人間万事塞翁が馬」にもあるように逆境を逆境ととらえることなく、

引き続き変わらず日展作家の名に恥じぬよう努力して参る所存です。

最後に、コロナ禍の中、日展が無事に開催され、皆様と共に笑顔でお会いできることを心より祈っております。



新審査員として

橋本一貫 (第二科 準会員・審査員)

大学を卒業してすぐ、雲の上の世界のような日展に初めて出品しました。結果は落選でその後も何年か落選が続きましたが、初入選の時の喜びは今も忘れることはありません。

この度は、初めて審査員という大役を仰せつかり、責任の重大さを感じております。初出品以来ご指導を頂いた先生方や先輩方に感謝いたしますとともに、そのご恩に報いるためにも精一杯務める所存でございます。

私は静物や風景を描くことが好きで、特に古びたものや遺跡などをテーマにすることが中心となっています。そのようなものたちを眺めていると、辿ってきた歴史を想像し、やがて描きたくなってくるのです。コロナ禍で動きにくい昨今ですが、風景や自然に触れあったり、美術館やその他の文化行事など幅広く鑑賞しに、できるだけ出かけるようにしています。

これからも毎日研鑽を積み、審査員として恥じないように努力してまいります。



まだやるべきことがある

村井良樹 (第三科 会員・審査員)

七月末日、第九回日展審査員委嘱の知らせを家内を通じ病床で受け取った。市の健康診断により発覚し、内視鏡センターでの精密検査の結果、大腸左腹部に腫瘍が発見され、分析結果はステージⅢの大腸がんと診断された。七月十九日に腹腔鏡による摘出手術を受け、リンパ節や他の臓器への転移もなくステージⅡaの比較的早期の発見だった。「不幸中の幸い」で、まだやるべき事がある。そんな中での四回目の審査員就任だった。

四回目の審査員となると、審査の手順や陳列の仕方などは初審査とは違い経験済みから要領は得ているものの、一人ひとりの作品の審査に関しては、大きな責任と緊張感を持って初審査と変わらずに行う必要があると思う。そのためには、まず自分の作品を頑張らなければならぬ。

現在でも、納得のいく作品が出来ていないが、教職退職を機に新たな分野（金属溶接で具象をどう表現できるか）に挑戦するため、専用の作業場建設から始める事とした。



作品に込めた想い

伊庭照実 (第三科 準会員・審査員)

この度、第九回日展において審査員を拝命し、今まで以上に気持ちを引き締めて制作に取り組んでいます。

私の彫刻制作は、いつもモデルさんとの対話から始まります。人間は一人ひとり性格も体つきも異なるので、同じポーズでも人がかわれば全く異なるものになってしまいます。

その人が美しく見えるポーズを探してスケッチやエスキースをしています。

少し前までは、前方や上を見て力強いイメージの作品が多かったのですが、最近は床を這ったり、体をかがめたりして、苦しんでいる人間の姿にも目を向けるようになりました。その苦難を乗り越えて生き続けようとする人間の真の力強さを表現していきたいと思っています。

審査に当たっては、出品者一人ひとりの作品に込めた思いを感じ取りながら、それぞれの作品に真摯に向き合いたいと思います。



第九回日展審査にあたり

紺谷 武 (第三科 準会員・審査員)

この度、初めての日展審査員を拝命するにあたり、大きな喜びとともにその重責に身が引き締まる思いをしています。

仕事場に入り作品を見渡すと学生時代のこと思い出しました。その頃は技術があれば何でもできると考えていました。自分の個性などはどうでもよく、誰が作ってもいい作品は良いし、よくないものは良くないのだと考えていました。とにかく技術を身に付けようと自分らしさなど考えず「いいな」と思ったことは何でも取り入れて制作していました。

今あらためて作品を見ると、技術ではない、なんだかんだと普段の自分の生活が自分らしさとして作品に現れているように見えました。普段何を見て、どんな人とどんな話をして、どんなことを考えて、何を楽しいと思っ、どんな気持ちで、そんな日常の過ごし方や生き方がかたちとなって作品に現れているように見えました。そんな目でもう一度作品を見渡すと、まずは襟を正し日常の一つひとつを大切にしながら制作と審査にあたらなくてはいけない、そう思った次第です。



山上更に山有り

河合徳夫（第四科 会員・審査員）

私が日展に出品し始めた頃は、明確な制作目標もないままに制作に悪戦苦闘する辛い時期が続きました。徐々に釉薬の研究も進み流動性の有る釉薬を使って作品を制作出来る様になり、やがて独自の表現を求めて釉薬で色面を作り、それを構成した作品を制作、会員になるまで続けました。会員になってからは素材を磁器に変え植物をモチーフにして制作をしています。私の制作を振り返ると、出品を続けて行く中で独自の表現を作るのは大変な作業だと感じます。特に陶芸の場合は素材の研究が伴うので尚更です。



また、長く同じ表現を続けていては、技術の開発も無く手馴れた作業に安住してしまい魅力のない物にやがてなってしまうでしょう。そうならないためにも新しい表現に挑んでほしい。習熟度は下がるかも知れませんが、新たな頂を目指して制作に励んでほしいと思います。

第九回日展審査にあたり

先人達に導かれて

高名秀人光（第四科 会員・審査員）

この度、日展工芸美術二度目の審査員を拝命し重責を感じ身の引き締まる思いです。

昭和五十五年（一九八〇）より先輩方の背中を追うように出品を重ねてまいりました。今まで、諸先輩、先生方のご指導のお陰と深く感謝しております。

漆の黒は、「漆黒の闇」と表現されるようにこれ以上の黒は無いということでしょうか。その黒を中心にして素材と技法を用いて、螺鈿や金属粉、乾漆粉などを使い自然の幻想的生命感を作品に表現してまいりました。

今回、再び審査員として機会をいただき、全国から作品に込められた様々な情熱を真摯に受け止め、審美眼を持って誠心誠意務めてまいりたく存じます。



審査員として

早瀬郁恵（第四科 準会員・審査員）



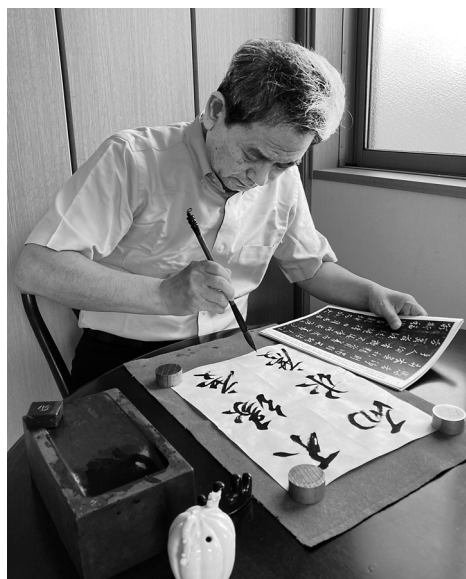
第九回日展におきまして初めて審査員を拝命することとなり、初入選の通知を受けた時のことが思い出されます。日展には初出品して以来二十五年が経とうとしていますが、審査を受ける側での緊張感とは異なる緊張感と責任の重さを日毎に感じ、改めて魅力ある作品を作り続けているかを自身に問われている気がしております。

大学で工芸の世界にふれ、制約の中にある染色表現の可能性に惹かれて創作活動が続けてまいりました。日々の制作の中で大切にしていることは、表現するテーマと素材との関わり方です。自然は、時に思いもよらぬ美しい造形を見せてくれます。日常にある景色やその変化に感じたものを心の奥に留めて、その記憶をもとに移ろいゆくものと在り続けるものを材料の特性を生かし、制作しています。

工芸美術には、様々な工芸素材と技法による作品があり、審査の難しさはありますが、応募作品に込められた想いを受け止められるように一点一点に対し丁寧に対峙したいと思います。

審査員としての仕事

中村伸夫（第五科 会員・審査員）



公募展では審査員の方こそ、審査結果について厳しく審査されるのだと思います。日展の場合は、社会的役割の大きさからいっても、応募者に対する責任ある審査員の仕事が特に求められています。

言うまでもなく、審査員の仕事は、多様な作風を認めた上で、一点一点の応募作に対して、完成度を問いつめ、すぐれた作品群を選び出すことです。

応募点数が多い第五科では、限られた時間の中で、このことの貫徹は決して容易なことではありません。しかし、日本の書の発展を期して、個々の審査員の努力が結集されれば、審査員全員の責任において、よりよい結果が導き出せるものと信じています。

入選と落選を繰り返していた自分が、今は審査員という立場になっていることの不思議を思えばかりです。審査員に選ばれたことに感謝し、しっかりと頑張りたいと思います。

伝統ある日展の書

田中徹夫（第五科 会員・審査員）

この度、第九回日展審査員を拝命し、重責に身の引締まる想いでおります。

日展への出品作品は、一年間の集大成と位置付けられており、研鑽を重ねて書き込んだ重みのあるものです。

特にコロナ禍の中、いろいろな制約を乗り越えたどりついた、種々の思いのこもったものに違いないと考えております。

出品されている一点一点に真摯に向き合い、公平・公正に鑑審査に臨みたいと思っております。今回で三回目の審査を務めさせていただきますが、回を重ねるごとに緊張し、責任の重さを痛感しています。

「伝統ある日展の書」に相応しい素晴らしい作品に一点でも多く出会えることを楽しみにしています。



第九回日展新審査員を拝命して

深瀬裕之（第五科 準会員・審査員）

この度、第九回日展の審査員委嘱書類を拝受し、同封されていた日展規則を熟読しました時、その厳格な内容に身の引き締まる思いがしました。

若い頃「君には日展出品はまだ早い」と言われ、日展に出品できることが榮譽であると思っていた時期もありました。その後初出品以来、会場で次回作の構想を頭に描きながら、多くの作品を拝見することを常としておりました。同様に、日展は多くの書人が一年の集大成の場として、心血を注いだ作品で臨むところだと思えますので、鑑審査をする立場としては自らを振り返り、学んできたことに間違いはなかったか？書を見る目に独善はないか？等々、日ごとに不安が増幅して息苦しささえ覚えます。

今はただ、師はもとより、諸先輩に感謝しつつ、この機会を新たな学びの場として、役目にあたらせていただく所存です。



日展パートナーズについて

日展は、その前身である文部省美術展覧会（文展）の創設から今年一一五年を迎える伝統ある美術団体です。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書と五部門からなる日本最大規模の「日本美術展覧会」には全国から多くの美術ファンのご鑑賞を頂いております。日展は展覧会事業の他に、美術に関する調査研究事業、美術に関する講演会及び講習会事業、美術鑑賞及び創作に関する体験講座事業、美術研究冊子及び図書刊行事業等を通じて、我が国美術文化の振興発展に寄与することを目的としています。

これらの諸事業を推進するには、多くの個人の皆様並びに法人・団体の皆様からの深いご理解とご支援をいただくことが欠かせません。

日展では平成二十九年より、日展の公益事業活動に賛同し、ご支援くださる方々を対象とした賛助会員制度「日展パートナーズ」を設け、運用いたしております。皆様方には、本趣旨にご賛同いただき、温かいご支援を賜りますよう「日展パートナーズ」へのご加入を心よりお待ちしております。

日展パートナーズは、公益事業活動を財政的にサポートいただく賛助制度（寄附制度）で、個人と法人・団体を単位として募集いたします。

（個人）

一口／年 二〇、〇〇〇円

（十口まで申し受けます）

（法人・団体）

一口／年 一〇〇、〇〇〇円

（十口まで申し受けます）

ご寄付いただいた日展パートナーズ賛助金は、毎年開催される「日本美術展覧会」及び関連事業の助成に活用されます。

日展パートナーズにご寄付いただいた方へは、「日展パートナーズ証」が発行され、「日本美術展覧会」の鑑賞など、特典をご利用いただけます。

（詳細の問い合わせ）

日展事務局

TEL 03 (3821) 0453

賛助会員制度《日展パートナーズ》

（掲載希望者のみ 令和4年8月末現在）

●個人

青木晃子様	新井演子様	石崎國夫様	井上道守様	今村忠司様	奥田節子様	梶山純子様	兼重勇希様	草野曾舟様	呉 祐輔様	児玉安司様	坂本美賀子様	佐藤大悟様	島谷弘幸様	高木寛史様	田頭益美様	竹尾明子様	田中宏欣様	土屋礼央様	寺田則昭様	中室里恵様	西村潤帰様	野田裕一様	藤本真之様	宮島幸男様	村里 暁様	吉見次郎様
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

●法人・団体

東 晋一郎様	飯田真未様	井谷善恵様	今田功一様	岩田 薫様	角井 博様	金子美和様	岸野 田様	栗原直子様	黒田浩平様	近藤慎男様	佐川かおる様	澤田優也様	鈴木千壽様	田頭明子様	高橋千笑様	竹本葉子様	土橋正彦様	寺岡宏高様	中原有三様	西田俊通様	西村友子様	藤田理恵子様	堀 稲子様	宮原和朗様	森寫順子様
--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------



《夕暮》
(昭和52年 遊星会展出品作)



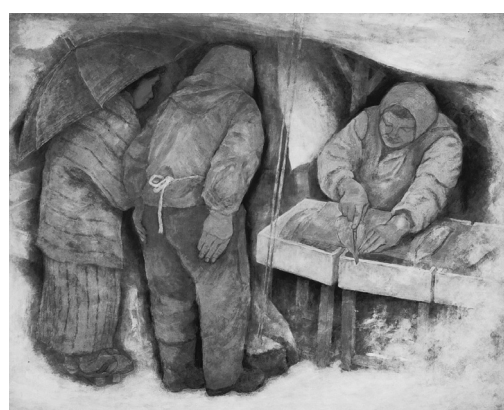
《島の朝》
(昭和46年 十実会展出品作)



《最上川》(平成8年 第28回日展出品作)



《凍る浜》(昭和58年 遊星会展出品作)



《雪の日日》(昭和56年 第13回日展出品作)

ぼんぼん人生は流れのままに

第一科日本画 会員 川崎 鈴彦

長い人生色々なことがあり今日がある。父小虎は大和絵から出発して大正ロマンの時代に青年期をすごし自然流に到達した。私はその影響を受けていることに間違いないが、絵に対する執念は半分にも及ばなかった。私が東京美術学校(現 東京藝術大学)に入った時は既に日米戦争は始まっており、四年生は学徒動員、残った我々は軍事教練と勤労動員。予科から一年になった時突然の美校改革があり、結城素明先生方が去り安田靫彦、小林古径、奥村土牛、山本丘人、田中青坪の各先生方がこられた。私は香川県豊浜の陸軍船舶隊に入隊したので、本格的に指導を受けたのは戦後になってから。

敗戦後、日本画滅亡論があったり、「生活感のない絵は駄目だ」といわれ、働く人物像を描くようになる。やがて日本の伝統文化の美点が東北の秋田や沖縄に残っていることを知り写生旅行が続いた。そのような時、山本丘人、高山辰雄、吉田善彦の三先生が会派を越えたグループ展遊星会を作り、さそって下さった。毎夏、展覧会を開催し、全力投球をした十年間は愉しかった。遊星展が終了した翌年にはボストンのハーバード大学で美術専攻ではない学生に日本画を教えるという企画があり、妻と二人で渡米。半年余と短期ではあったが、大学は全寮制で教師も家族と共に同じ寮に住み、食堂も学生と一緒に、初めての外国生活は目から鱗の連続で、教えるより教わることばかり。最初の授業の時、学生からいきなり「メデイテイション(瞑想)の方法を教えてください」といわれて面喰った。東洋の神秘的芸術が医学の研究飛躍に役立つという考えである。

日展の制作が本業であることは言うまでもないが、新聞小説の挿絵の時は水墨画の練習のつもりであった。TVの企画で「おくのほそ道」を歩いて画にした時は、芭蕉から「旅の効用は、日常性から離れることで自然の命にふれることができる」と教えられた。確かに、無我夢中で写生をした時、あとで見て自分では全く意図していなかった不思議なものが画面に現れていて驚くことがある。自然の力が助けてくれたとしか考えられない。

長い間日展にはお世話になっており有難く思っている。

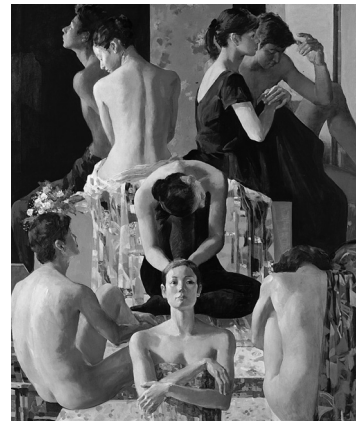


《嘆》(平成11年)



《伊須気余理此売》

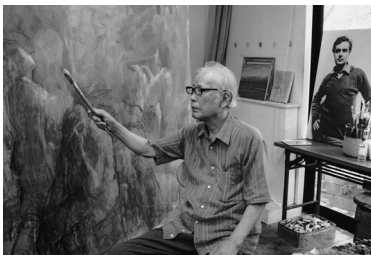
(平成29年 改組 新 第4回日展出品作) 内閣総理大臣賞



《めざめ》

(平成14年 第34回日展出品作)

日展会員賞



平成4年

第23回日展米子会場にて

精霊を求めて呻吟する

第二科洋画 理事 小 灘 一 紀

「芸術とは何だろう」十二歳で美術の道を志してから、ひたすら絵画技術と真の芸術表現の模索にあけくれてきた。

私の生まれた鳥取県境港市近辺には出雲神話の伝承地が、きら星のように点在している。幼少より八岐大蛇や因幡の素戔(白兔)を聞きながら育った。しかし現代の日本人はもとより、当地の人さえ神話を知らぬ人が多くなった。それを危惧し『古事記』を題材に神話を描くことを決心して二十年になる。

私は題材が決まると神社や遺跡、伝承地を訪ね、目に見えない古代の世界を想像する。不思議と私の内部から溢れる熱情というべきか、神々の情景が浮かんでくるようになり、その幻想的場面を絵画にしてきた。描き続けながら、日本人の魂の根源は古事記や万葉集にこめられていると思うようになった。ドイツの哲学者ヘーゲルは「民族の精神こそ真の個性を作る」と言っている。

日本は言霊(ことだま)の国である。古事記の神々の行動や歌には古代人が流した血と涙の物語があり、先祖の美しい願いを込めて日本の文化を形作っている。また、日本で歌は最高の芸術といわれるように神々の雄叫びや悲しみ、恋の歌など芸術表現の精神がある。

本居宣長によつて解読された古事記を絵画化し制作することは困難な作業である。しかし私は古事記の神々は日本人の祖(おや)であり、古代人の心が現代人に通じぬはずはないと信じて描き続けている。

芸術は慰みでもなく、タペストリーだけの要素でもなく、ましてや単なる趣味でもない。"混乱した世の中に崇高な精神を思い出させてくれるもの"として、人間の魂を活性化し肉体以上に大切な心を吸い上げてくれるものだと思う。

真の人間の魂が崇高なものを求めて躍動する心を持ち続けて制作したい。いまだ未完な状態であるが。

「私は歴史の中に生まれ 歴史の中に死にたい」と思う。

委員会委員新人事

令和四年七月二〇日開催理事会において、左記委員が選考された。

日展運営委員会

日本画	福田 千恵
洋画	佐藤 哲
彫刻	山田 朝彦
工芸美術	春山 文典
書	高木 聖雨

新刊行物のご案内

第9回日展作品集

- 定価三、三〇〇円（税込）
 - 令和四年11月4日発行予定
 - 五部門の全会員・審査員・受賞者の作品図版
 - 別冊作家本人による作品解説、釈文（書）
 - 諸資料
 - A4判変型
 - オールカラー約一五〇頁
 - 表紙 村居正之・寺坂公雄・能島征二・大樋年朗・高木聖雨（出品作・予定）
- ※ご注文方法等、詳細はホームページにてお知らせします。

第9回日展図録

（五部門五分冊）

- 定価 各三、三〇〇円（税込）
- 令和四年11月9日発行予定
- 東京会場の全陳列作品図版・目錄を収録
- （作家名・作品題名の読み仮名付）
- 全作品に作品寸法、工芸美術には技法を表記
- 審査所感、授賞理由ほか諸資料
- A4判変型

第一科『日展の日本画』

オールカラー 約六五頁
表紙 村居正之（出品作・予定）

第二科『日展の洋画』

オールカラー 約一五〇頁
表紙 寺坂公雄（出品作・予定）

第三科『日展の彫刻』

オールカラー 約六〇頁
表紙 能島征二（出品作・予定）

第四科『日展の工芸美術』

オールカラー 約一二〇頁
表紙 大樋年朗（出品作・予定）

第五科『日展の書』

全会員・審査員・篆刻はカラー、準会員・無鑑査・特選・一般入選はモノクロ 約二二〇頁
表紙 高木聖雨（出品作・予定）

日展会館（本館）利用案内

日展会館（本館）の貸しスペースはギャラリー・会議室・教室として、ご利用いただけます。なお、新型コロナウイルス感染症対策として、利用人数制限を設けております。詳細はホームページをご覧ください。

（利用に関する問い合わせ）

公益社団法人日展 施設管理係
電話 03(3821)0453

表紙
「袁枚詩」

二〇〇五年（平成十七年）
第三十七回日展
227×60cm
劉 蒼居
（二九四一〜二〇〇六）
日本芸術院蔵

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

東	俊行先生	巨画・会	4・7・20
名	嘉地千鶴子先生	彫刻・会	4・8・10
池	田 道夫先生	巨画・会	4・9・1

編集後記

コロナ禍も三年目をむかえて、良きにつけ悪しきにつけ「慣れ」を感じるこの頃です。

出口の見えない混迷が世界を覆っているように感じますが、だからこそ、より一層芸術が心を支え勇気づけてくれるのではと考えています。

現代の対立や不信による絶え間ない争いは、むしろ人間の退化の表れとも感じられます。しかし、その一方でまだまだ前に進もうとする人々の絆や力があり、その源は想像力と手を繋ぐ勇氣なのでしょう。

今回の日展ニュースは、幅広い分野の素晴らしい先生方や、様々なお仕事をされてきた審査員の方々から文章をご寄稿いただき、より視野を拡げていただきましたことに心より感謝申し上げます。

日展の次へのステップが更に開かれていくことを期待したいと思います。
（川田）

編集委員

川田 恭子	水野 収
清水 優	前原 喜好
堤 直美	野原 昌代
月岡 裕二	友定 聖雄
西村 東軒	福光 幽石